

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範疇のものとして捉えて下さい。

重度の自閉症のある人の世界を「感覚過敏」から読み解く

- 構造化によって感覚過敏による「自分という車」の運転のハイジャックを防ぐ -

私自身も重度のカナー型のお子さんを担任する度に「どうすれば、社会と交渉・調整できる人、楽しめる余暇をもって暮らせる人、堅実に働くことができる人をめざしていけるかな?」と頭を悩ませます。

さて、基本に立ち戻り、知的障害のある児童を支援する場合にまず着目するポイントは2つあります。認知発達の遅れと、適応障害の2つの側面です。シンプルな知的発達症（名称はICD-11に拠る）であるならば、認知発達の遅れは下学年適用や特別支援学校学習指導要領の適用をして、基礎学力を保障し、自己肯定感を付けて適応障害の改善を図っていく…という道筋になるのですが、重度の自閉スペクトラム症（以下、自閉症）の有るお子さんの指導・支援となると、感覚過敏やシングル・フォーカスなどの障害特性が学習をジャマするので一筋縄ではいきません。

I. 勇気をもって問題行動に介入するために、知っておかなければいけないこと

重度の自閉症のある児童の支援に必ず付いて回るのが「問題行動への介入」です。他害行動、異食、大声、唾吐き、水遊び…。多岐に渡りますが、20年以上前は積極的な介入が行われず、受容支援が行われ、成果は上がりませんでした。また、現在、どう理解されているかというと、例えば応用行動分析学会では、『望ましい行動が発揮されやすい環境を設定するポジティブな行動支援が十分に検討・実施されているという前提の上で、問題行動への直接的な介入は不可欠である』ことを学会声明の中で明記されています。

重度の自閉症のある人には、望ましい行動が発揮されやすい環境の中でのポジティブな行動支援を十分に検討していくこと（本号では構造化を掘ってみます）が何よりも大切です。それが本人の豊かな将来を開き、また自ら拓くことを支えます。本号では前号を承けて、『望ましい行動が発揮されやすい環境』って何？を掘り下げ、重度の自閉症のあるお子さんの指導・支援について考えていきます。

2. 感覚過敏をもつ自閉症のある人の感じている外界は、先生のそれと全く異なっている

前号の復習的に、自閉症のある人の独特な感覚の世界を表している一節を再掲載します。

・みんなは物を見るとき、まず全体を見て部分を見ているように思います。しかし、僕たちは、最初に部分が目に飛び込んできます。その後徐々に全体が分かるのです。例えば、蝶を見ます。すると、蝶と判断する前に、蝶の羽の白い色が目の中に飛び込んでくるのです。目で見ているものは蝶なのに、頭の中は白い色でいっぱいになります。…その後、すぐに全体に目が行くので蝶と認識します…。東田直樹 2007,2010

ややもすると私たちは「感覚過敏がある」ということを、「触られることがちょっとキライなんでしょう」とか「苦手なお友だちの声や体育のBGMが痛く感じちやうんだよね」くらいの表面上だけの捉えをしてしまいがちですが、感覚過敏のもつ問題はもっともっと複雑で、外界の捉え方や学習の困難さに、ツルのように絡み、食い入っています。上記の東田直樹さんの一節は、単なる「視覚過敏」やシングル・フォーカス、セントラル・コヒーレンス（葉ではなく、森を見る能力のこと）など特性単体の理解から一歩踏み込んだ「自閉症の世界」を象徴しています。薄っぺらい「共感」はただの自己満足なのかも知れません。



図1・感覚過敏

3 「自分という車」をハイジャックする「感覚過敏」

「感覚過敏」というと耳ふさぎや触られるのを嫌がるといった防衛反応が出ている場面を想起しがちですが、手をパチパチと叩くことやトイレの流れる水を繰り返し眺めること、クルクル回ること、股間をすりつけることなど、「こだわり」といわれる行動をとっている場合も「感覚過敏」が働いています。着目すべきは、以下の表現のように、「こだわり」と言われる行動は自分でコントロールすることができず、まるで「自分という車」をハイジャックされてしまうように本人も感じているということです。



図2・感覚過敏ハイジャック

『雨を見ると、今度は雨粒に見とれてしまい、自分がどこにいるのかも忘れてしまいま

す。次々と降り続く雨粒が、まるで僕の体をすり抜けて、地面に落ちているかのような感覚に陥る』

『こたつに入ると足が消える』

『自分の思い通りに動くのか、まるで人魚の足のように実感の無いものなので、まるで借りてきたロボットの中にいるようなのです。』

「感覚過敏」があると周囲の環境の刺激に自分をハイジャックされて、本人がどうしようもなく「行動の自由」が奪われてしまうという感覚に、もっと寄り添っていけるといいな…と私自身思います。パニックといわれる状態になることや、どうしようもなく手を叩いたり、ジャンプしたりすることは、この感覚のハイジャック状態に必死に抗っている（戦っている）場合もあるようです。

4 重度の自閉症のある子どもの二項関係（私-モノ）から三項関係（私-あなた-モノ）への移行

ことばを獲得する際、通常発達であれば「お母さん - 私 - モノ」の3つの関係（三項関係）の中で、視線共有をして、「ああ、あれは○○という名前のものなんだな」という命名（モノに名前があることが分かること）が起きます。その中で赤ちゃんは言葉を増やしていきます。また、知的障害特別支援教育の中では、「先生 - 私 - モノ（教材）」のやはり三項関係の中で、「具体物 - 具体物マッチング」、「具体物 - 写真マッチング」、「具体物 - ことばマッチング」、「写真 - ことばマッチング」という過程を経て、命名課題を通過して PECS 等の補助代替コミュニケーション手段（AAC）を獲得していきます。要するに子どもと先生で教材を真ん中に置いて学習を進めていきますよね。一方で、自閉症のある子どもは①障害特性としての「人への興味の薄さ」から、「お母さん」や「先生」が抜け落ち「私 - モノ」の二項になりやすいことや②視覚・聴覚・触覚・嗅覚・振れ・加速などの前庭感覚などが、その子をハイジャックして、特定のモノ（例えば水）への没入になったり、特定のモノ（例えば大きな声）への回避になったり、また、それに引っ張られることが原因での無視になったり、感覚過敏に引っ張られての不自然な長期記憶化になってしまふという、三項関係へのなりにくさがあり、これらが言語発達のしづらさにつながっています。

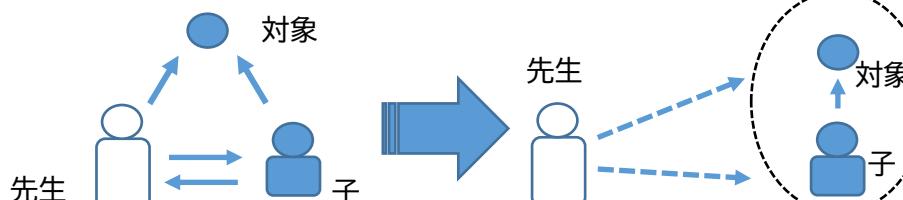


図3・自閉症のある子どもは2項関係になりやすい（右図の参考文献から抜粋）



5 『構造化』で、自閉症のある人と通常発達の人との外界の捉え方をつなぐ

上記に挙げてきたように、自閉症のある人の特性に基づいた外界は、通常発達の人の生きている外界とは全くの別世界です。しかし、学校やひいては共生社会の中では、その別世界を理解しながらも、自閉症のある子どもたちの学びやすい環境を確保しつつ、授業では他の障害を持つ児童と共に活動し、生活することができる共存・協働の方向性を探っていくなくてはいけません。そして、上記の①自閉症特性としての人への興味の薄さや②感覚による「自分のハイジャック」とも言える現象への代表的な対応策として「構造化」を挙げることができます。構造化には自閉症のある人と通常発達の人の世界をつなぐ役割があります。私たちは「構造化」と聞くと、すぐに「＝パーティション？」と閃いてしまうのですが、もう一步踏み込んで構造化を理解することが、自閉症世界に住む人と、周りで学ぶ人、学びを支える人たちの共存・協働を支えます。以下、3つの観点から構造化を掘り下げてみます。

① 視覚・聴覚などの過剰な感覚刺激によるハイジャックを防ぐ構造化

例えば、構造化のない教室を見渡せば、窓の外に拡がるグランドやら、ホワイトボードに貼り付けてある様々なカード、棚の上の教材に、休み時間にだけ使って良いことになっているおもちゃ等々の視覚的に飛び込んでくる感覚刺激や、友達の声、隣のクラスのBGM、外の体育の音…等々聴覚に飛び込んでくる感覚刺激、給食室方面から漂うカレーの香りや隣に座る先生の柔軟剤の香りなどの嗅覚に飛び込んでくる感覚刺激、背もたれに体重をかけると「ギシッ、ギシッ」ときしむ前庭感覚の刺激…等々、「本来的に教材に向かわなければいけない注意」を奪ってしまう感覚過敏のハイジャックから児童を守るという意味での「刺激の少ない環境をつくり出す役割」が構造化の役割として挙げられます。具体的にはパーティションを使うこと？別室を作ること？椅子を変えること？柔軟剤を変えること？イヤーマフを使うこと？などです。また、構造化した上で先生の振るまいについては、共同注視の対象（教材）が見つけやすいように、目立たないようにしなければいけない場面が少なからずあるでしょう。

② 集団の場でのルールを見分けやすくする構造化

通常発達の人は、集団内でのルールを徐々に、じわりじわり理解していくって集団内に馴染むことができますが、自閉症のある人は、どこで何をするのか？いつ終わるのか？などを理解するのにとても苦手さがあります。いつまでたってもなじめない。（運動会練習で不安そうな顔をしていた子はたくさんいたのではないか）そういうった際に、安定した感覚刺激の世界に没入してしまう（砂遊び・クルクル回る・耳ふさぎするなど）、過度に反発してしまう等の姿が多くなってしまいがちです。その中で構造化は、じわりじわりではなく所見て集団の場のルールを見やすくするという役割を果たします。具体的には、どこにどう並ぶのかを示す足形や、集合場所を示すブルーシート、何をするのかが「モノ」として示されている環境、時計やタイマーがある環境や、DVDで昨年の様子を観る。終わり時間がBGMと連動している様な環境なども「構造化された環境」となります。

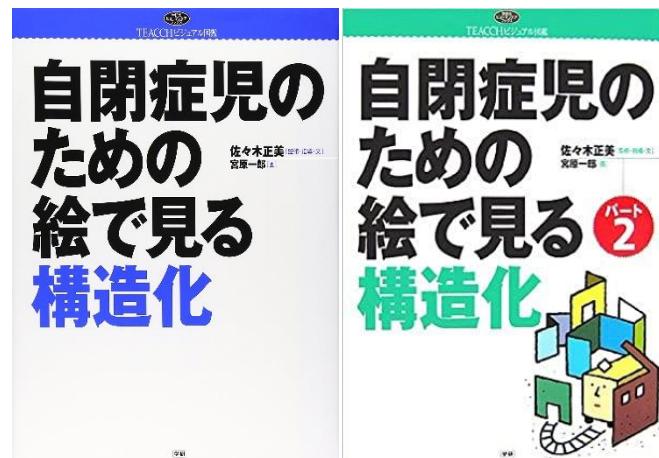


図 4-GAKKEN 絵で見る構造化 著・佐々木正美



図 5:最近ではコンビニにも足形がありますよね。

③ 「進み方」を示す構造化

自閉症のある人は自由時間を与えられても、上手く過ごすことができない人が多いと言われています。「声掛けをしないと動かない」とか「何かやることがあった方が落ち着いているよね」なんて言葉は先生達も日常の中で耳にしたり、口にしたりすることがあると思います。活動を自分で順序立てて進めていくことや、材料がたくさん有る中から必要物を自分から選び取っていくことについては、自閉症のある人にとつては、その一つ一つから感覚過敏という特性が受ける、過剰な印象やイメージがジャマをしてできないという背景があるようです。構造化にはその様な「進み方の分かりづらさ」を分かりやすくする役割があります。具体的には、スケジュールカードや、BGM、一連の運動として提示することが「感覚に囚われない進み方」を促す構造化となります。

※ 結構大切な事なのですが、予定表、手順表などの視覚支援のみに囚われず、例えば歯磨き BGM や手洗い BGM、柔軟ダンスなど聴覚、触覚をフルに使って進み方を提示することは、結構有効なんですよー。

以上、①から③のように、学研の「絵で見る構造化」をぱらぱらとみるだけではわからない構造化の背景がこういうところにあります。また、繰り返しになりますが、指導を体罰と線引きするためには『ポジティブな行動形成・行動変容をめざす環境支援』がポイントであり、その1つの大きなポイントが「構造化」です。①十分な環境づくり(構造化)をした上の②問題行動への適正な手段での介入、となります。

順番	月 日曜日	すること	時間		
				1	2

図 6・予定表。時計が二つ並んでいるとはじめと
終わりが分かりやすいですよね。



図 7・タイムタイマー

Amazon でも購入できます。